

『觀世音菩薩授記經』所説の阿弥陀仏の入滅

齊 藤 舜 健

一 はじめに

觀世音菩薩授記經には、曇無竭訳の『觀世音菩薩授記經』（以下、授記經）と施護訳の『如幻三摩地無量印法門經』（以下、施護訳）の漢訳二本とチベット訳が知られる。

この内チベット訳には漢訳二本と比べ著しい増広が見られ、また、所説の本生譚を授記經が釈尊のものとするのに対して施護訳・チベット訳は阿弥陀仏のものとするという相違はあるものの、その粗筋はおおむね一致している。

本稿で考察する阿弥陀仏の入滅は三本ともに述べられ、經典中でもつ意味はほぼ同じであると考えるが、特に授記經の記述が中国における阿弥陀仏の仏身論に大きな影響を与えたのであり、筆者が授記經を取り扱おうとする目的もここにあるので、授記經の記述に即して、所説の阿弥陀仏の入滅の意味を考えてみたい。

二 授記經の内容

授記經の内容は以下の如くである。

まず、華德藏菩薩が釈尊に如幻三昧の獲得方法を尋ね、答えを得る。更に釈尊より如幻三昧を獲得したものに觀世音菩薩と得大勢菩薩がおり、西方安樂世界に往生したものはこの二人の菩薩から如幻三昧を獲得するのだと教えられる。そこで、華德藏菩薩は二人の菩薩を娑婆世界に招くよう釈尊にお願いし、その願いを容れて釈尊は眉間の白毫より光を放つ。その神変を受けて、觀世音菩薩と得大勢菩薩は娑婆国土にそれぞれ四十億の眷属を引き連れて現れ、また、如幻三昧の力による神変をあらわす。この神変を見て、華德藏菩薩は二人の菩薩の発心について釈尊に尋ねる。そこで釈尊は、二人の菩薩と釈尊自身の本生を語る。その内容は、過去に無量德聚安樂示現国土に金光師子遊戲仏がおり、この仏に威徳王という法王は教化されていた。この王が三昧に入っていると、そ

の両脇に宝上・宝意という二人の童子が現れた。この三人は連れ立って金光師子遊戲仏のもとに赴き、二人の童子はそこで初めて発心した。実は威徳王こそ現在の釈尊であり、二人の童子はそれぞれ觀世音菩薩・得大勢菩薩であつて、無量徳聚安樂示現国土とは、現在の西方安樂世界のことでであると示される。この本生譚が説かれた後、華徳藏菩薩が、二人の菩薩が作仏する場所を尋ねると、阿弥陀仏の入滅後、先ず、觀世音菩薩が補処して普光功德山王如来となり、普光功德山王如来が入滅すると、得大勢菩薩が補処して善住功德宝王如来となる、と説く。その後、經典受持の功德・会座の大衆の得益などが述べられて終わる。

以上が授記經の概要である。

三 登場する仏・菩薩たちの關係

本生譚以降に阿弥陀仏の入滅とそれを取り巻く仏・菩薩たちの關係が述べられる。ここではそこに登場する、釈尊・阿弥陀仏・金光師子遊戲仏・觀世音菩薩・得大勢菩薩、などのような關係にあるのか、考えてみよう。まず、過去に於いて、

我於^レ爾時。為^二百千王^一。時初大王劫欲尽時。有^二世界一名^二無量徳聚安樂示現^一。其国有^レ仏。号^二金光師子遊戲如来^一。应^レ供正遍知行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊^一。

爾時金光師子遊戲如来法中有^レ王。名曰^二威徳王^一。于世界正法治化。

号為^二法王^一。

彼威徳王於^二八万四千億歳^一。奉^二事如来^一。不^レ習^二余法^一。仏知^二至心^一。即為^二演説無量法印^一。

と述べられるように、威徳王という法王がおり、彼は金光師子遊戲仏に教化され無量法印を授けられた。金光師子遊戲仏に授けられたこの無量法印は、

何等為^二無量法印^一。華徳藏菩薩。凡^レ所^レ修行。应^二当^一发^二心於無量誓願。何以故。菩薩摩訶薩。布施無量。持戒無量。……

というものであることから、彼が菩薩摩訶薩であつたことが知られる。次に、同じく過去に於いて、宝意・宝上と呼ばれる童子がおり、彼らは、

是^二菩薩於^二彼仏所^一。初^レ发^二阿耨多羅三藐三菩提心^一。

とされるように金光師子遊戲仏のもとで初発心をしたものであつた。但し華徳藏菩薩の、

甚奇世尊。是善男子。未^レ曾^レ发^二心^一。成^レ就^二如^レ是甚深智慧^一。了^二達名字^一。悉不可得^一。世尊。是^二正士於^二彼先仏^一已曾^レ供養。作^二諸功德^一。……

という言葉からわかるようにそれまでに菩薩たるべき資質を積上げていたものであつた。威徳王・宝上・宝意の三者は、

爾時威徳王豈異人乎。我身是也。時二童子。今觀世音及得大勢菩薩摩訶薩是也。

とあり、威徳王は現在の釈迦牟尼仏、二人の童子は觀世音菩薩と得大勢菩薩である。また、

善男子。今此西方安樂世界。當於爾時。号無量德聚安樂示現⁽⁸⁾とあり、現在の安樂世界が無量德聚安樂示現世界だったのである。

次に、未来に於いて、阿弥陀仏は、

阿弥陀仏壽命無量百千劫。當有終極。善男子。當來広遠不可計劫。阿弥陀仏當般涅槃⁽⁹⁾。

というように、般涅槃する。観世音菩薩・得大勢菩薩は、

善男子。阿弥陀仏正法滅後。過中夜分明相出時。観世音菩薩。於七宝菩提樹下。結跏趺坐成等正覺。号普光功德山王如來應供正遍知行足善逝世間解無上士調御丈夫天人土仏世尊。……世尊。彼仏国土名安樂耶。仏言。善男子。其仏国土号曰衆宝普集莊嚴。善男子普光功德山王如來。隨其壽命。得大勢菩薩。親近供養。至三千涅槃。般涅槃後。奉持正法。乃至滅尽。法滅尽已。即於其國。成阿耨多羅三藐三菩提。号曰善住功德宝王如來應供正遍知行足逝世間解無上士調御丈夫天人土仏世尊⁽¹⁰⁾。

とあるように、阿弥陀仏の滅後にまず観世音菩薩が普光功德山王如來という仏となり、この仏が般涅槃するまで得大勢菩薩が奉事する。そして、普光功德山王如來が般涅槃すると、得大勢菩薩が善住功德宝王如來とよばれる仏となるのである。

また、現在に、釈尊は娑婆世界の教主であり、観世音菩薩・得大勢菩薩は阿弥陀仏に仕え、教化を受けている菩薩摩

『観世音菩薩授記經所』説の阿弥陀仏の入滅(齊 藤)

訶薩である。彼らは、如幻三昧を獲得しており、若有菩薩。從彼正土。七日七夜聽受是法。便得如幻三昧。華嚴藏菩薩。白仏言世尊。彼國應有無量菩薩得是三昧。何以故。其余菩薩生彼國者。皆當往至彼正土所。聽中受是法⁽¹¹⁾。

とされるように、他の菩薩たちに如幻三昧を教授する。さらに、如幻三昧を獲得したものは、菩薩として、得是三昧。以善方便化其身。隨衆形類所成善根。而為說法。令得阿耨多羅三藐三菩提⁽¹²⁾。

とされるように、救済活動に励むわけである。また、阿弥陀仏は、

又願見彼安樂世界阿弥陀仏。令此善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心⁽¹³⁾。

とあることから、発心の契機、つまり阿弥陀仏を媒介として菩薩となつてゆく、と考えられたようである。

これらの關係をまとめると、

1、過去：金光師子遊戲仏が威徳王・宝意・宝上を教化する。

威徳王(釈尊)は奉事する菩薩。

宝意・宝上(観世音・徳大勢の両菩薩)は初発心する。

2、現在：釈尊は娑婆世界の教主。

阿弥陀仏は安樂世界の教主。

釈尊・阿弥陀仏はそれぞれの国土の衆生と觀世音・得大勢を教化する。

觀世音・徳大勢の両菩薩は阿弥陀仏に奉事する。

3、未来1：阿弥陀仏は入滅する。

觀世音菩薩は普光功德山王如来となる。

得大勢菩薩は普光功德山王如来に奉事する。

4、未来2：普光功德山王如来は入滅する。

徳大勢菩薩は善住功德宝王如来となる。

となる。ここに、登場する仏・菩薩たちが相互に教化・被教化の關係にあることがみてとれる。これらの教化・被教化の關係は、現在の釈尊が娑婆国土で教化に当たっていること、阿弥陀仏が過去にどこで誰によって教化されたのかが明示されていないことを除けば、すべて現在でいう安樂国という場での出来事である。そして、この關係は、かつて教化された者が教化した者が般涅槃した後、作仏して教化に当たり、さらにここで教化された者が再び教化する立場にたつ、というものであつて、これが過去から未来にわたって連続していることを示している。特に觀世音菩薩と得大勢菩薩を娑婆世界に招聘するように釈尊に願った際に、華徳藏菩薩が、

又願見彼安樂世界阿弥陀仏令此善男子善女人 発阿耨多羅三藐三菩提心。願生彼国。生彼国已。絶不退転阿耨多羅三藐三

菩提。⁽¹⁴⁾

と述べ、阿弥陀仏にまみえることによって娑婆世界のものたちに阿耨多羅三藐三菩提心を発させ、阿耨多羅三藐三菩提から退転しないようにさせたい、と願ったことや、金光師子遊戲如来のもとでの出来事が説かれる発端となつた、華徳藏菩薩の、

世尊。是三正士。久如発阿耨多羅三藐三菩提心。⁽¹⁵⁾於何仏所。唯願説之。令諸菩薩。修此願行。具足成就。⁽¹⁶⁾

という質問に示されるように、阿弥陀仏を契機として菩提心を発し、さらに、觀世音・得大勢菩薩と同じ願行を具えることを求めるという内容によって、菩薩として觀世音・徳大勢菩薩の働きを担うことを目指す菩薩の姿が示されているようである。今、阿弥陀仏を契機として菩提心を発した者は、さらに、「この「觀世音・得大勢菩薩の」願行を修し、具足し成就せしめる」とあることから、いずれば、現在の觀世音・得大勢菩薩が作仏して、それぞれ阿弥陀仏・普光功德山王如来を補処するのと同様に、彼らのあとを補処して行くことまで想定していると考えられる。ここに、へ教化されたものが教化者となり、更に新たに教化されたものが教化者となつてゆく」という構造を見ることが出来る。

この構造は、現在の安樂世界が過去に無量徳聚安樂示現国土であつた時に、金光師子遊戲仏を媒介として、現在の觀世

音・得大勞菩薩が初めて発心したのであるから、過去から綿々と続いて来た構造であると考えられる。

四 まとめ

授記經の阿弥陀仏の入滅をめぐる所説から読み取ろうと試みた構造は、授記經と同じく阿弥陀仏の般涅槃を説く初期無量壽經類にも見ることができる。すなわち『大阿弥陀經』・『無量清淨平等覺經』に述べられている、阿弥陀仏によって救済される有情たちが、菩薩となり作仏し弟子を教授された者がまた弟子を教授する、という構造であり、また、阿弥陀仏の般涅槃後、觀世音菩薩と得大勢菩薩が相次いで作仏して阿弥陀仏と同様の教化活動をし、しかもこの流れがどこしえに断絶することがない、という記事である。この説話には、阿弥陀仏によって教化された者が阿弥陀仏の教化活動の一翼を担い、そして觀世音・得大勢と次第して次々に作仏し、阿弥陀仏が担っていた働きを継承するという構造が見られ得る。⁽¹⁸⁾

初期無量壽經類の場合は、現在の阿弥陀仏を契機として未來に連なって行く構造が示されているのに対して、授記經では阿弥陀仏自身が相対化され、現在という一場面での教化の働きを担うに過ぎないように理解されている。特に施護訳・チベット訳のように、本生譚を釈尊のものではなく阿弥陀仏

『觀世音菩薩授記經』所説の阿弥陀仏の入滅(齊 藤)

のものとする場合には、この理解がいつそう明確になる。以上、授記經に説かれる阿弥陀仏の般涅槃をめぐる、そこに示される構造を浮き彫りにしようと試みた。初期無量壽經類にも同様の構造が見られるが、この構造は後期無量壽經類では完全に消滅してしまふ。無量壽經類が消滅させたこの構造を、阿弥陀仏の般涅槃を示しつつ更に明確に示したのが授記經であると理解することができるのではあるまいか。

- | | | | | | |
|----|---------------|----|---------------|----|-----------|
| 1 | 大正一二卷三五五下 | 2 | 同三五五下 | 3 | 同三五五下 |
| 4 | 同三五五下 | 5 | 同三五六下 | 6 | 以下同 同三五六下 |
| 7 | 同三五六下 | 8 | 同三五六下 | 9 | 同三五七上 |
| 10 | 同三五七上 | 11 | 同三五三下 | 12 | 同三五三下 |
| 13 | 同三五四上 | 14 | 同三五四上 | 15 | 同三五五 |
| 16 | 『大阿弥陀經』：同三〇八下 | 17 | 『大阿弥陀經』：同三〇九上 | | |
- なお、阿闍世王太子の發願と授記も初期無量壽經類にのみ見られる記事であるが、その内容は、阿弥陀仏の二十四願經が説かれるのを聞いた阿闍世王太子と長者の息子たちが、自らも阿弥陀仏のようにになりたい、と願ひ、授記されるものであり、この構造を支えるものと理解できる。¹⁸ 初期無量壽經類のこの構造については、平成六年度日本宗教学会大会にて「菩薩としての願往生者」と題して報告した。要旨は『宗教研究』三〇三号三三〇頁。

〈キーワード〉『觀世音菩薩授記經』、阿弥陀仏、入滅

(仏教大学非常勤講師)